

ハイブリッド/ マルチクラウド時代へ突入

企業がこれから生き残りを図っていくためには、IT戦略としてクラウド・テクノロジーの十分な活用を進めていくことが不可欠。しかしながら、従来のオンプレミスとクラウドには、それぞれメリットやデメリットがあります。たとえば、コストといった観点では、オンプレミス型では機器の導入に多額の初期コストがかかるだけでなく、専門の運用チームを置くことによる人件費などランニングコストもかかります。これに比べると、クラウドではデータセンターで全て行われるので、かなり費用が削減されます。ただ、速さにおいてはオンプレミス型には敵いません。すべてをクラウドにすればいいわけではなく、オンプレミスとクラウド双方をうまく連携させ、目的に合わせて適材適所で利用していくことが必要です。こうしたオンプレミスとクラウドとの連携、そしてAWSなど各社さまざまなクラウドとの連携が、ハイブリッド/マルチクラウドと呼ばれる技術です。これからのIT戦略で核となる技術とも言えるでしょう。

AWSも対応可能なSDSソリューション 「IBM Spectrum Virtualize」

IBMは、「IBM FlashSystem 5100」において、ハイブリッド/マルチクラウドを実現するためのSDSソリューション「IBM Spectrum Virtualize」を提供しています。オンプレミスに「IBM Spectrum Virtualize」、そしてクラウドに「IBM Spectrum Virtualize for Public Cloud」を導入することで、それらをまとめ、あたかもひとつのストレージを構成しているかのように見せる仮想化技術です。クラウド環境は、IBM Cloudに限らず、Amazon Web Services (AWS)にも対応しています。「IBM Spectrum Virtualize」を導入することで、オンプレミスやクラウドとそれぞれ異なるストレージであることを意識させることなく、スムーズなデータの移行や複製といった連携ができるようになります。また、統合管理により違いを意識せず操作できるため、複数のクラウドを使う際の「操作・運用の違い」といった課題も解消されます。オンプレミスとクラウドの統合運用は、個別に利用していた時と比べてクラウドの利用パターンを増やせるだけでなく、開発環境、バックアップ先、データ分析など、クラウドとオンプレミスのそれぞれのメリットを生かしながらシームレスに業務利用することが可能になります。適材適所のシステム利用と統合された運用を行うことで、ビジネス上のワークロードの負荷分散が実現できます。

未確認物体

IBM FlashSystem 5100



特徴
2

シームレスに瞬間移動！

IT技術の進展とともに、オンプレミスからクラウドへと急速なクラウド利用の拡大が続いています。2019年に総務省が国内の情報通信サービスの利用状況について発表した「平成30年 通信利用動向調査」でも、クラウド利用企業の割合が58.7%になるなど、前年度の56.9%からさらに伸びています。ただ、先の証言（漫画）にもあるようにクラウド導入を懸念する声も少なくありません。ここではその障壁を解消する「IBM FlashSystem 5100」の2つ目の強み、「クラウドとのシームレスな連携」を解説します。



クラウド活用の幅を広げることが、IT戦略で優位に立つチャンスに

「IBM FlashSystem 5100」は、ハイブリッド/マルチクラウドの利用が進む中、クラウド利用の壁ともなっている「コスト」「データの移行や連携」といった課題を解決します。バックアップ用の保管先として、災害対策用として、さまざまな目的でクラウドを活用することができるようになります。災害発生時

のBCP（事業継続計画）においても、オンプレミスとクラウドの連携でデータの完全な保存と迅速な復旧が可能。 「IBM FlashSystem 5100」は、クラウド、オンプレミス、それぞれの仕組みのメリットを生かし、ビジネス効率の大幅な改善を実現します。



次は、障害が発生し、ピリピリムードとなった際の
開発部と運用部の証言です
「FS5100」によって、彼らはどう変わったのでしょうか